

東北大学出版会 報

第 37 号

宙

おおぞら

〒 980-8577
仙台市青葉区片平 2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
www.tups.jp
info@tups.jp

2024 年 10 月

自著を語る



α 星

『戦争の哲学』

自由・理念・講和』

横 地 徳 広

二〇二三年五月、日本哲学会に招かれる。第八十二回大会シンポジウム「戦争と暴力」のことだが、これは、鈴木泉先生から突然のお誘いをいただいたことに始まる。

会のあと、小さくもしつかりと懇親会が開かれ、そのとき鈴木先生がおっしゃるに、仙台ご出身。しかも、鈴木先生のご尊父が私の師匠である篠憲二先生を、なんら

かのきっかけで詩人として認識しておられたとも。埼玉で生まれ育ち、終電を気にして暮らしていた身としては、何時だろうと歩いて帰れる仙台では、いくらでも勉強できた。

東北大学博士後期課程では表裏六年のあいだ在籍し、表の最終年途中からだったか、仙台を離れる。篠先生からお声掛けがあり、東北哲学会で発表したりもしたが、そのうち、地元で契約社員として働く毎日となる。哲学書に一切ふれない一年以上が訪れ、それどころか、本自体、網野善彦『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』を通勤時にぼつぼつと読む程度、本当にそれだけであった。

空っ風が身体を凍てつかせる十二月、突然、携帯電話が鳴る。

篠先生から「研究助手をやらないか」という連絡だった。

……研究生生活はもう終わったと思っていた。ありがたかった。

東北大学に戻って最初の二〇〇七年度末、課程博士論文『超越の倫理——ハイデガーとレヴィナス』を書いたが、一章一章、できるたびに篠先生が朱筆を入れてくださった。

二〇一五年、その博論にアレント論を加えて『超越のエチカ——ハイデガー・世界戦争・レヴィナス』（ぶねうま舎）を公開し、実はその続編が東北大学出版会『戦争の哲学——自由・理念・講和』である。

歴史学では大家ピーター・パレットがおり、カール・フォン・クラウゼヴィッツがカント哲学をヨハン・キーズヴェッターから学んだことに触れている。ただし、彼の講義内容までは教えない。だから、『戦争の哲学』後半部ではキーズヴェッターはすでにその著作『カントの基本原則にもとづく一般論理学概要』（一七九一年）で『統整的理念』と「体系」概念に注目し、「全体論の書」として『純粹理性批判』を読んでいたこと、それゆえ、クラウゼヴィッツ『戦争論』（一八三二年）もまた「全体

論の書」として執筆されたことを明かす。

篠先生が「軽んじてはいけない」と強調されていた超越論的哲学、すなわち、カント『純粹理性批判』、フッサール『イデーエン』、ハイデガー『存在と時間』の系譜にクラウゼヴィッツ『戦争論』を「カント主義の書」として位置づけたわけである。

拙著前半部はと言えば、全体主義者が「すりかえ」を多用する具体的な仕方とその原理を解き明かすことに努めた。

政治思想家として独り立ちしたアレントは、学部時代に聴いたハイデガーの講義『プラトン——ソピステス』を批判的に吟味し、独自の思索を深めていく。この『プラトン』講義はアリストテレス『ニコマコス倫理学』からプラトン『ソピステス』を照らし、両著作に散りばめられた諸概念の「存在史」的対応関係を指摘するが、ソフィストが自分の実存をも騙るまでの手口を暴くことで『ソピステス』篇の全体を統一的に解釈する。彼女はこれをふまえ、『存在と時間』では相対的に重視されなくなった「存在論的なこと」と「存在者的なこと」の「絡み合い」を彼女なりの仕方で引き受け、かつ、「存在史」を変奏して「政治思想史」を自家薬籠中のものとする。

「複数性と自由」というテーマを秘めながら、その否定的形態史を記した『全体主義の起源』や未完の主著『政治入門』は、ハイデガーへの批判的応答であり、ここで見定められたのは、アレントが目撃したナチス親衛隊は「すりかえ」を駆使する二十世紀的ソフィストだったということである。

ちなみに『戦争の哲学』「あとがき」に少しく記したが、二十五年前に遡る座小田豊先生からの宿題「カント美学の主観的普遍性とは何か」には、『戦争の哲学』のさらにその先でやっとお答えできるかもしれない。

（よこち のりひろ・弘前大学人文社会科学学部准教授、専門・西洋倫理思想史、二〇〇三年東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了）

戦争の哲学

自由・理念・講和

横地徳広 著 A5判・二六八頁・三九六〇円



β星

英語教育のための

マネーボール

ライアン・スプリング

二〇〇三年に、実話に基づいて書かれた『マネーボール 奇跡のチームをつくった男』（マイケル・ルイス著）がベストセラーとなった。経営難のプロ野球チーム「オークランド・アスレチックス」の監督が、厳しい財政状況の中、統計分析を利用して優勝を目指し奇跡を起こした話は、野球が嫌いな私の心にも響くものであった。

外国語としての英語教育において成果を出すのは非常に困難なことで、「アスレチックス」が優勝を目指すのと似ていると思う。「英語能力を伸ばすために、学生を全員留学させればいい」、「毎週一〇〇時間以上、英語を使わせればいい」など、安直な提案もあるようだ。こうした案は確かに効果的だが、金銭的にも時間的にも多くの学生にとっては非現実的である。つまり、多くの学生は資金力のあるプロ野球チームではなく、「アスレチックス」なのだ。短い時間でできるだけ英語力を伸ばさな

ければならない。そのため、効果的な学習法というよりも、効率的な学習法が必要となってくる。

英語教育で成果を出すのは、野球と同様に大変なことである。対象者は人間であるため、個人差は非常に大きい。また、多くの英語学習者はゼロから学び始める訳ではないため、できるだけ正確に言語能力を測ろうとしても、統計的変動を小さくするのは難しい。こうした理由からか、統計分析を諦め、先行研究ではなく「勘」に頼る教育者や教育研究者が少なくないようだ。スタートラインとして、経験で判断するのもよいと思うが、「アスレックス」と同じような奇跡を起こしたければ、データ収集と統計分析を繰り返し、データに基づいて前に進まなければならない。

東北大学の全学教育英語科目を共通カリキュラムにし、その質を向上させる目的で、二〇一九年に英語教育改革推進ワーキンググループが結成された。その成果の一つは、新しいカリキュラムの内容を扱う指定教科書『Pathways to Academic English』である。一年目はできるだけ多くの同僚と協力し合い、先行研究を参照しながらこの教科書を作成し、さらにオンライン授業の副教材としても使用できるようにした。私が評価基準ユニット

リーダーとしてこのワーキンググループに関わることになった時、その数年前に読んだ『マネーボール』のことを思い出さずにはいられなかった。「アスレックス」の監督のように、実証研究をしながらデータを集め、英語能力向上のための原因と要因を調べる研究を繰り返して、統計分析とデータを基に教科書や教材の改善をしようと心に誓った。

私は二〇一〇年から四年間『Pathways to Academic English』の編集長を務め、オンライン教材も中心となって作成に取り組んだ。この間、教えているスキルが本当に学生のためになっているか実証研究をし、必要に応じて教科書や教材の改善を行ってきた。また、効果的な学習法に関する研究をし、向上する要因の調査などを繰り返し、その結果をなるべく早めに教材に反映させてきた。例えば、単語リストを選定する際、まずはじめに学生の事前知識を調査し、採用した単語の学習到達度が英語能力向上に繋がっているかどうかを統計分析で調べ、結果に応じて教科書の内容の修正を行った。また、ホームページを作成し、教員にとってはオンライン教材が管理しやすいように、学生にとってはより快適に個人学習ができるようにした。また、オンライン教材に関しても、英語

力向上のために効果的かどうか、どう調整すれば最も効果的になるか、改善のための研究に日夜取り組み、その成果を教材に反映している。

「アスレチックス」の監督は、決して一人で奇跡を起こしたわけではなかった。そしてもちろん、私も私一人だけではなく、同僚との協力体制のもとに研究し、教材の開発と改善を実施している。高度教養教育・学生支援機構の英語科の多くの教員の努力のおかげで、本学のTOEFL ITP® テストで測る一般学術英語能力の向上・到達は、年々少しずつ良くなってきている。今後も、より多くの教員と協力しながら、機構の「アスレチックス」が徐々に奇跡を起こし、毎年、前年よりも少しでも学生のためになる英語カリキュラムが提案できれば、これほどうれしいことはない。

(らいあん すぶりんぐ・東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授、専門・第二言語習得、二〇一四年東北大学(国際文化) 博士後期課程修了)

Pathways to Academic English 4th Edition, v2

東北大学高度教養教育・学生支援機構 編

A4判・二二頁・二二〇〇円



γ 星

新米研究者の放浪記

高橋直也

私の専門は地形学であり、特に山地を流れる河川を対象として、川の形に地域差が生まれる理由について研究している。例えば、起伏の小さい山地をゆったりと蛇行しながら流れる川と、険しい山地を荒々しく流れる川があるのはなぜか、という具合である。小さい頃から遊ぶのが好きで、河川敷を散歩することも多かったが、川の研究をするために大学に進学したわけではなかった。

大学で地球科学を学び最初に興味を持ったのは氷河地形であった。といっても実物は見たことがなく、写真集で見た景色に魅せられて、漠然と興味を持っていただけである。その後、二〇一四年に長野県白馬村で地震が発生し、現地を見に行ったことがきっかけで地形学に強い興味を持った。地震が起きると、その地震を引き起こした活断層に沿って崖ができることがある。その崖は地震が繰り返すにつれて高さを増し、長い時間をかけて丘陵や山地に成長していく。二〇一四年の地震で生じた崖は

最大でも高さ一メートル程度であったが、周囲の地形をよく見ると、もともと崖が存在していた場所や、山麓に沿って崖が出現していた。それまでは地球科学自体にあまり強い興味を持っていたわけではなく、地震の繰り返しによって地形が成長していくこともよく理解していなかったと思う。しかし、新たな地形が生まれた現場を目にして衝撃を受け、急に研究意欲が湧いたことは鮮明に覚えている。

博士研究では、川の形から活断層の活動を探る、というテーマに取り組んだ。川の形は地殻変動による影響を強く受けるため、その空間分布をよく見れば地殻変動速度の分布がある程度推測できると考えられている。手探りの期間が長かったものの、何度も川に赴いて汗をかきながら歩き回っているうちに、川に行くこと自体が楽しくなっていた。その結果、活断層研究の手段としてではなく、川の地形そのものを研究するようになり、現在にいたる。

こうして過去を振り返ると、興味の対象が変わりやすいということを再認識し、長い研究者人生で明らかにしたいことはなにか、と考えることがある。今後の研究の芯となるような疑問を持たなくても大丈夫なのか、とい

う不安に駆られる。一方で、興味に任せて手を広げることも悪くないと感じることもある。学生と一緒に研究をしていると、自分が全く経験のない研究に取り組むことがよくある。着任当初は、自分の研究に直接役立たないことに時間を使っているのかという気持ちが強かったが、着任から数年という短いうちでも、思いがけぬところで自分の研究に役立ったことが何度もあった。未だ教育と研究のバランスをうまく取りかねている中で、短期的な利益が見込めないことに手を出すことは億劫になりがちであるが、学生との研究のおかげで、未経験の研究にも挑戦することができている。

興味のままに手を広げるといふ進め方でもいいと思うようになった理由はもう一つあり、私の専門である地形学の不確実性に関係している。地球科学の研究に広く共通する問題だと思われるが、地形学で取り扱う現象は、時間、空間スケール共に観察不可能なものが多い。川の地形を例にとると、川が岩盤を削る速度はほとんどの場合 10^{-10} m/yr 程度であり、数年程度では大きく変化しない。気候や地殻変動速度など、川の周辺環境が変化すると、それに合わせて川の形も変化していくが、その変化に数百万年かかることもある。実際に観察ができな

以上、いろいろな仮定を置いたうえで最も確からしい結論を探すことになるが、その仮定のなかには妥当性が検証不可能なものも含まれている。このように不確実な部分が多く存在する地球科学では、多角的に検討することが特に重要だと考えている。視野を広げすぎて広く浅くなってしまおうという懸念はあるものの、他分野の研究者や学生の助けを借りることで、広く深い知識を身につけていきたい。

（たかはし） なおや・東北大学大学院理学研究科助教、専門・地形学、二〇二一年三月博士後期課程修了）

柳宗悦とウイリアム・モリス

工藝論にみる宗教観と自然観

なぜ工藝は人間にとって重要なのか？ 柳宗悦とウイリアム・モリスの工藝論の背後にある思想的興行きを探る比較思想研究の試み。



島貫 悟 著 A5判・二五四頁・八二五〇円



8 星

私の本棚

「明治の東京」から 日本文学へ

横溝 博

二〇二三年春に国立近代美術館で開催された『没後五〇年 鑑木清方展』は、清方藝術の粋を集めた大規模な回顧展であった。本展でもっとも注目を浴びた作品は、清方の代表作《築地明石町》（昭2）である。本作は《新富町》《浜町河岸》（昭5）とあわせて三部作とされる作品の一つで、代表作でありながら長らく所在不明だったものだ。私も実物を目にしたのはこのときが初めてである。これまでの展示では下絵のみが出展されていて、作品はパネル展示のみであった。それだけに、『築地明石町』への憧れをつのらせていた私は、長年の夢がかなった気持ちで、作品を前に、しばし陶然と佇んでいた。

じつは私が文学を意識し、日本文化のもつ抒情性に強く惹かれていくことになった大きなきっかけは、清方（一八七八—一九七二）の美人画である。元来、絵を描くことが好きだった私は、高校生の時には藝大に進学し

たいと考えていた。それも日本画である。日本画には歴史上の人物や近代の風俗などがよく描かれる。それら絵の素材となる日本文化を知るためには、有職故実を学ぶことだと考えた私は、日本古典文学にも目を向けるようになった。そうした読書の中で、明治の風俗や文化にはひとときわ心惹かれるものがあつた。そのとき出会つたのが清方である。女性美に表象された江戸から明治にかけての日本文化——清方のきめ細やかでのびやかな描線と、色彩の微妙な濃淡によつて描き出された美人画の数々は、明治の東京の風俗をよく写しとつて浪漫的であり、観る者を明治の時代へと引きこむ。すっかり清方の藝術に魅了された私だったが、清方の抒情の根底に、樋口一葉や泉鏡花の文学への親しみがあることを知つた。そして、清方が挿絵画家としても、また文筆家としても、日本の近代文学史に大きな足跡を残していることを知り、ますます清方にのめり込んでいくこととなる。

知られるように、清方は数多くの文章を残している。明治の東京の風俗や市井の人々の生活をしたためた文章は、『鐫木清方随筆集』『明治の東京』（岩波文庫）によつて読むことができる。清方の生い立ちや画業にかかわる時事雑感については、『こしかたの記』『續こしかたの記』

（中央公論美術出版）に詳しく書かれている。清方の文章の多くは、『鐫木清方文集』（全八巻・昭54／55）にまとめられている。ただ『鐫木清方文集』は全集ではない。未収録の文章は巷間に多く残されている。そもそも清方はたんに文章を書くだけではなく、自ら装釘を施した単行本を折々に刊行している。清方自装の本の数々は、清方藝術の一つに数えあげてよいだろう。そのようなわけで、『文集』に飽きたらなくなった私は、とうとう初版本にまで手を伸ばすようになった。

『築地川』『銀砂子』（昭9）『褪春記』（昭12）『柳小紋』『連翹』『東なまり』『道中硯』『絵具篋』（昭18／19）等々、扉に瀟洒な手摺木版画をあしらつた彩り豊かな本の数々。なかでも『蘆の芽』（昭13）は、清方自装の本としては特装版で、挿絵も多く、清方の趣味がよくあらわれた特別な一冊だ。私は絵にかんしても、雑誌『苦楽』など、清方画が表紙に用いられているものはよく集めた。そうした表紙絵の数々は、先の回顧展でも出展されていたが、清方の装釘になる本も、展示品に加えてほしかったと思つたのは、私だけであらうか。

初版本蒐集の世界は、多くの本好きなマニアたちが迷い込む沼である。私にとってそのきつかけとなつたのが、

清方の本であったのは奇しき縁である。それよりも、清方は近代文学の親しみかたを教えてくれた。また市井の人々の生活へのいとおしみというものを教えてくれた。大学生のころ、江戸情緒をもとめて都下を散策したのはよい思い出である。画境に通じる感覚というものを、研究者となったいまも、手放すことができないでいる。

(よこみぞ・ひろし・東北大学大学院文学研究科教授、専門・日本古典文学、二〇〇三年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学)

人文社会科学の未来へ

—東北大学文学部の実践—

東北大学文学部 編

東北大学文学部で学べる二十六の学問分野について、担当教官自らがその奥深さや魅力を紹介する。人文社会科学の未来を担う人への1冊。

A5判・四〇八頁・三三〇〇円



ε 星

帰郷―「若手研究者出版助成」から
故郷が与えてくれたもの

山口 睦

研究者は生涯にいくつの研究テーマに取り組むのだろうか。それは、分野や研究者によってまちまちだろう。私は、気が多い質であり、調査地や人、資料との出会いまかせなところもありいくつかのテーマに取り組んできた。中でも、生まれ故郷の福島、出身地である仙台という地域に関連して取り組み始めたものが災害支援である。大学院に入学してから文系としては普通と言われる十年をかけて博士論文を提出し、東北大学出版会の若手研究者出版助成をいただき出版準備をしていた時に東日本大震災が起きた。当時は埼玉県に住んでいたが仙台市泉区に実家があり、研究者として何か災害支援に携われないかと思索した。そこで、東北大学を中心として宮城県内の文化人類学者や民俗学者が集まり取り組んだ無形民俗文化財の被災調査に参加する機会を得ることになった。文化人類学は基本的に個人で行う調査が多い分野であるが、この時は数十人の研究者、院生、学生らが集ま

り、調査地を分担して調査者と補助調査者というペアを組んで被災地に入った。がれきも残り、ようやく避難所から仮設住宅への入居が終わる二〇一一年秋に始まった調査は、被災地の役にたてるとの確信が持てない状況で臨んだ。

その成果は、調査地ごとにまとめた報告書という形式で、続いて調査を継続した各研究者の興味関心に沿った論文集という形式で世に出された。津波被害を受けたこれらの地域の無形民俗文化財は、震災前からきちんとした調査が行われていなかったため、震災後とはいえ状況把握ができたことには一定の成果があったといえるだろう。また、メディア映えるということ差し引いても、社会の中で一見腹の足しにならず経済効果も定かではない地域の祭りや伝統芸能が人々の生活に果たしている役割、地域社会の存続に果たしている役割を再認識する機会となったことは周知の通りである。

このプロジェクトの終了後は、個人的なテーマである贈与と結び付け「災害支援と贈与」という視点で被災地調査を続けている。阪神淡路大震災後に始められた女性や高齢者が手芸などの手仕事によって生活再建の一助とするコミュニティビジネスに着目した。東日本大震災後

にも多くの手仕事ビジネスが発生し、寄付された靴下でつくったソックスモンキーなどを事例として、材料や商品アイデア、広告、流通などの支援を企業やNPO法人などが担い、被災者が生産者となり、全国の人々が消費者に支援者となる様相を描き出した。宮城県だけでも八十を超える手仕事ビジネスの団体が生まれたのはなぜだろうか。そういった疑問を持ち、さらに神戸、熊本などでも調査を行った。必ずしも東日本大震災と同じような状況は見られなかったが、これらの被災地において被災者自身が立ち上がりとする自助とそれを助けようとする多様な人々・団体の支援活動の様子は共通していた。

一定の歳月をおいて連続する自然災害は、かつての被災地を次なる支援者とする。「恩返し」と称され、次なる被災地へ支援を行う様子「地域間贈与」は、現代だけでなく二十世紀前半においても確認できた。歴史をさかのぼり、二十世紀前半の婦人会組織の広報紙の分析からは被災地間のやりとりが見えてきた。たとえば一九二三年関東大震災の被災者は、一九三四年関西風水害（室戸台風）においてかつて受けた支援の恩を返すために支援を行った。こうして、形を変えながらも災害支援という行為は連綿と続いてきたことが分かった。

自らが生まれ育った東北の地においてこれほどの被害をもたらした災害が起きなかつたら、自分は災害研究を行ったのだろうか、と自問することがある。結局研究活動は自己満足に過ぎないのではないかとも思う。しかし、どのようなテーマで研究を行っていても、いつもお金にならない調査に時間と労力を割いて協力してくださる地域の人々への感謝を忘れずに真摯に向き合っていくことが今後も自分にできることだと感じている。

(やまぐち むつみ・山口大学人文学部准教授、専門・文化人類学、二〇〇九年東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程修了)

山口 睦 著

贈答の近代

人類学からみた贈与交換と日本社会



近世後期から現代まで、日本社会における贈与行為がどのように変化したのかを、多様な資料から考察する。

A5判・三〇四頁・三八五〇円

第七回 東北大学出版会 若手研究者出版助成刊行書籍

書評



と星

『東日本大震災からのスタート―災害を考える51のアプローチ―』

原 信義

人類史上未曾有の複合型大災害となった東日本大震災から十三年が経過した。大規模な地震はその後も日本の各地そして世界中で発生しており、とりわけ、本年元日に発生した能登半島地震は死者・行方不明者が二五〇人を超える大災害となり、地震と津波の脅威を改めて実感させられた。また近年、地球温暖化が原因とも言われる豪雨や異常気象による災害も頻発するようになってきた。今後も自然災害の発生は避けられないだろう。しかし、災害による被害をゼロ、もしくは最小限に近づけることはできるはずである。そのためには、まず過去の災害をあらゆる角度から検証し、そこで得られる知見を基に防災・減災の取組を実践することが必要である。本書は東日本大震災一〇周年を契機に、東北大学災害科学国

際研究所が中心になって編纂したものであり、震災を「自然科学」、「人文・社会科学」、「災害医学・健康科学」の三つの科学分野から総合的にとらえ、なぜ被害が生じたのか、当時何ができたのか、今後何が必要なのかを問いつながり、これからの防災・減災のあり方を提言している。

日本の大学には自然災害に関する三つの大きな研究拠点がある。関東大震災（一九二三年九月）のあとに東京大学地震研究所、ジェーン台風（一九五〇年九月）を受けて京都大学防災研究所、そして東日本大震災（二〇一一年三月）で東北大学災害科学国際研究所が設立された。次の災害に備えるために科学的な研究が重要であることを示している。その災害科学の中心は理学・工学などの自然科学であるが、災害科学国際研究所には人文・社会科学および災害医学・健康科学分野があり、さらに研究成果を国内外の防災・減災対策に生かすための防災推進実践部門もあるなど、ユニークな特徴がある。東日本大震災で露呈した現在の科学技術システムの弱点や限界を克服することを目指しているからである。

本書は災害科学国際研究所の十年間の活動成果を分かりやすくまとめた一冊であると言ってもよい。全体は研究分野に基づいて四部に分けられており、それぞれの部

の表題はすべて「東日本大震災によって進化した」で始まり、第一部では「災害の評価と防災」、第二部では「人間と社会の科学」、第三部では「健康の科学」、第四部では「国内外との連携」と続く。それぞれの部は複数の章に分けられていて、全部で五十一ある。これが本書の副題となっている「51のアプローチ」である。各章の構成は、第一節「東日本大震災が明らかにした問題」、第二節「震災が破壊したパラダイム」、第三節「新しいアプローチ」、第四節「到達点とこれから」、「おわりに」執筆者から」となっており、図や写真を用いながら四ページ程度で簡潔に記述されている。章ごとに内容は完結しているのも、どこから読み始めても戸惑うことはない。大災害の経験や教訓を社会全体として生かすことは重要であり、いろいろな取組が進められている中で、本書には科学的な視点に立脚した広範なアプローチが紹介されている。

物理学者の寺田寅彦は関東大震災の経験を綴ったエッセー「天災と国防」（一九三四年発行）の中で、「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増す」と述べている。確かに、地震・津波で原子力発電所の事故が起こることなど、ひと昔前には考えられな

かったことである。私たちは文明の進化によって、豊かで快適な生活を享受できるようになった見返りとして、自然災害の複合化、大規模化に直面し、気象災害、感染症パンデミックなど、様々なリスクと隣り合わせに生きることを余儀なくされている。一方で科学の進歩は災害に備える取組の高度化を可能にするはずである。本書によってそのような取組の現状と課題の多くを知ることができる。沢山の方に読んで頂きたい一冊である。

(はら のぶよし・東北大学名誉教授)

東日本大震災からのスタート

災害を考える

51のアプローチ

東日本大震災からのスタート
LESSONS
FROM THE 2011 GREAT
EAST JAPAN EARTHQUAKE

災害と考える51のアプローチ
51 APPROACHES
TO DISASTER SCIENCE
(あらゆる角度から捉えた
防災・減災のあり方の提言！)
※ 東北大学災害科学国際研究所 編

東北大学災害科学国際研究所 編

B5判・二三四頁・三三〇〇円



7 星

東北大学出版会だより 37

変化の時代こそ原点回帰

伊藤 房雄

昨年の初冬にこれまで三十有余年にわたりお世話になってきた出版社が廃業した。社員数名の零細企業ではあったが、主に私の専門である農業経済学にかかわる良質な専門書や農学関係の一般書を数多く発行してきた出版社であった。廃業の数ヶ月前に出版企画を持ち込み、原稿をお待ちしてまずとの返信を受け取っていただけに、未だにやるせない寂しさと原稿の取りまとめを迅速に進められなかったことへの忤怩たる思いを引きずっている。代表者の病氣と社員の高齢化で店仕舞いすることになったと伝え聞いてはいるが、年々厳しさを増す出版業界にあって業績の回復を見通せなくなってきたことも暖簾を下ろす誘因になったのではないかと推測している。

ところで、「出版不況」と言われて久しいが、ここであらためて今日の出版業界の状況を確認してみよう。総務省統計局「日本統計年鑑」によると、わが国の書籍及

び雑誌の年間出版点数は、戦後の総人口の増加や社会経済の発展などに伴い右肩上がりに増大してきたものの、書籍は二〇一三年の八万二五八九点をピークに二〇二一年は六万九〇五二点へ、雑誌は二〇〇五年の四五八一点をピークに二〇二一年は二五三六点へと、近年は毎年減少する傾向を示している。次に、日本出版販売株式会社「出版物販売額の実態」からここ二〇年間（二〇〇一年から二〇二〇年）のわが国の出版社数と総売上高の推移をみると、前者は四四二四社から二九〇七社へ、後者は三・二七兆円から一・六二兆円へと両者ともに大きく落ち込んでいる。それに併せて二〇二〇年の年間売上高規模別出版社数と年間売上高の構成割合をみると、出版社数全体の一％（二十九社）足らずの年間売上高一〇〇億円以上の企業による売上高が総売上高の五・五％を占める一方で、年間売上高一億円未満の出版社数は七〇・三％と全体の七割を占めているにもかかわらず、その総売上高に占める割合はわずかに二・七％に過ぎず、わが国の出版業界が寡占状態にあることを見て取れる。

このような状況のなかで東北大学出版会の立ち位置を確認すると、書籍出版点数は毎年二十数点、年間売上高は一億円に遠く及ばず、先のデータに照らし合わせてみ

ると、中小というよりも零細な規模の出版社と言えよう。ただし、本会は少額とはいえ毎年黒字の当期純利益を計上しており、持続性の高いビジネスモデルとなっている。

このため事業運営等で早急に改善を要する課題に直面しているわけではないが、出版業界を取り巻く環境が大きく変化しているもとで、本会でも検討すべき中長期的課題は少なくない。例えば、インターネットの利用が常態化している今日、東北大学出版会は今後電子書籍やデジタル配信にどのように向き合っていけば良いのか、ここ数年採択件数が低調になっている若手研究者出版助成事業を活性化するためには何が必要なのか、等々である。これらは検討継続中であるが、そのほかにも月一回の出版会議ではさまざまな案件が俎上にあがり、時に編集担当理事の間で侃々諤々としたやりとりが交わされることもある。会議を主宰する関内隆理事長と資料を準備してくれる小林直之事務局長、事務局の黒澤朝子さん、石川（菅原）里沙さんには後々余計な（？）負担をかけることになるので心苦しいのだが、この丁々発止のやりとりは私にとって出版会議に参加する密かな愉しみになっている。そこでは文系理系を問わず専門分野の異なる編集担当理事の幅広い知識と経験知にもとづくモノやコトの

捉え方、そしてその先にある深い見識に触れることができるからである。

今後もしユリシクしていくわが国の書籍マーケットに東北大学出版会はどのように向き合い適応していけばよいのか、議論は尽きないが、これまでの出版会議でのやりとりから示唆されていることは、先行き不透明なときほど本会の設立趣旨に立ち返り、良質な図書を丁寧につくり続けることを忘れてはならないということである。出版会議に参加し始めて約十年、あらためて「初心忘るべからず」を痛感している。

(いとう ふさお・東北大学大学院農学研究科教授)

東北農業経済学会 出版企画編集委員会 編

東北水田農業の展開と将来像



東北農業の生産基盤である水田農業について、その構造と政策、担い手、地域組織、将来展望を詳細に検討する論考集。

A5判・三八六頁・四九五〇円

科研費による出版を承ります

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費(学術図書)」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声がけください。「見積書」「発行部数積算書」の作成を承ります。

〈実績例〉

令和五年度

内藤真帆 著 『Tutuba-Bislama-English Dictionary』

令和三年度

滝波章弘 著 『地域が創る「あさか舞」福島県郡山ブランド米の産地像』

平成三〇年度

西田文信 著 『ナムイ語文法の記述言語学的研究』

高橋美能 著 『多文化共生社会の構築と大学教育』

高橋秀太郎・森岡卓司 編 『一九四〇年代の「東北」表象 文学・文化運動・地方雑誌』

平成二九年度

尾園絢一 著 『パーニが言及するヴェーダ語形の研究―重複語幹動詞を中心に』

学術出版をお考えのみなさまへ

専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシーディングなどの出版をお考えの方は、ぜひ小会宛にご連絡ください(連絡先は表紙面参照)。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談を承ります。

「宙（おおぞら）」第三十七号に御寄稿くださったみなさま、ありがとうございます。おかげさまで、とても充実した内容になりました。

このたびの七星の文章には実に多くのことを学べますが、「機縁」ということのかけがえのなさを感じ得るように思いました。 α 星には、研究を支える機縁の不思議さと、その機縁をたいせつに生かして根源的な考察を進めることの意義の深さを感じました。 β 星からは、教育における実現可能な効果を十分に生み出す上で、効果の向上につながる現実可能な計的に丁寧に関心にする努力を続ける必要があることを学びました。 γ 星には、教員として学生と共に地形を研究することが、地球を考える研究者としての専門の考究を広げ、深める得難い機縁となることが記されています。 δ 星には、日本画家、錦木清方の作品「築地明石町」への憧憬が文学研究への進路を開いたという、本をめぐる妙なる機縁が語られています。 ϵ 星には、被災した地域での調査の成果をもとに「地域間贈与」という形の災害支援が復興の貴重な機縁となることが示されています。 ζ 星には、文明の進展に伴って災害が深刻化する中、防災、減災のためには、科学的視点に立つて従来の弱点や限界を直視することを機縁にした真摯な研究活動の継続がいっそう重要になっていることが述べられています。 η 星には、良質な図書を丁寧にじっくり続ける「初心」に立ち帰る機縁を持ち続けることが「出版不況」を乗り越える力になるという確かな希望が示されています。

ここに記したのは、七星の文章から受けとめられることのごく一部です。本号からも、本とその周りに豊かな知が息づく、ということを強く実感していただけたと思います。

（佐倉由泰）

宙

（おおぞら）に輝く北斗の七つの星に寄せて、
東北大学出版会が読書人に贈るエッセー

第三十七号

内

容

α 星

自著を語る／『戦争の哲学 自由・理念・講和』横地徳広（弘前大学人文社会科学部准教授）

β 星

英語教育のためのマナーボール／ライアン・スプリング（東北大学高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育センター准教授）

γ 星

新米研究者の放浪記／高橋直也（東北大学大学院理学研究科助教）

δ 星

私の本棚／『明治の東京』から日本文学へ／横溝 博（東北大学大学院文学研究科教授）

ϵ 星

帰郷―「若手研究者出版助成」から／故郷が与えてくれたもの／山口睦（山口大学人文学部准教授）

ζ 星

書評／東北大学災害科学国際研究所編、東北大学出版会 二〇二一年三月刊行

η 星

『東日本大震災からのスタート―災害を考える51のアプローチ―』原信義（東北大学名誉教授）

θ 星

東北大学出版会だより37／変化の時代こそ原点回帰／伊藤房雄（東北大学大学院農学研究科教授）